



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の自尊心
感情を教師はどのように捉えて支援しているのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): mild intellectual developmental disorders, special support school, self-esteem, educational support 作成者: 李, 受眞, 橋本, 創一, 尾高, 邦生, 杉岡, 千宏, 廣野, 政人, 日下, 虎太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173406

知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の自尊感情を 教師はどのように捉えて支援しているのか

李 受眞*・橋本 創一**・尾高 邦生***・
杉岡 千宏****・廣野 政人*****・日下 虎太郎*****

1. 問題と目的

特別支援学校に在籍する知的障害のある生徒の人数は、ここ数十年の間に、一貫して増加の傾向を示している。文部科学省（2019）によると、平成30年度の特別支援学校在籍児童生徒数の中で知的障害児童生徒数の占める割合は、56.8%に達している。American Psychiatric Association（2013；以下、APA）によると、発達期に発症し、概念的、社会的、および実用的な領域における知的機能と適応機能両面の欠陥を含む障害を知的能力障害・知的発達症・知的発達障害（Intellectual Developmental Disorder）と定義している。軽度の知的能力障害については重症度により分類されている。また、就学前の子ども達において、明らかな概念的な差はないかもしれないが、同年代と比べて問題およびその解決法に対して若干固定化された取り組みが見られ、対人的相互反応において未熟で、複雑な日常生活上の課題では幾らかの支援を必要するとされている。本調査では軽度の知的能力障害を示す用語として、軽度知的障害と記す。

日本において、2000年度以降に子どもの「自尊感情」について様々な学術研究や調査が頻繁になされるよう

になった。東京都教職員研修センター（2009）による「自尊感情や自己肯定感に関する研究」の中で、自尊感情について「自分の否定的な面を受容するとともに、自分を他者との関わりを通してのかけがえのない存在としてとらえる気持ち」と定義している。また、「第7回世界青年意識調査報告書（平成16年1月 内閣府）」では、自分自身が誇れるものについて、すべての項目で、日本は韓国やアメリカ等の諸外国に比べて低い割合となっている。逆に「誇れるものはない」と回答した割合は8.3%であり、5か国中一番高い割合となっている。他国に比べ日本人の子どもの自尊感情の低さを重要な教育課題として捉えて、自尊感情の重要性が強調された。

特に、特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒が増えている現況の中で、特別支援学校高等部では「社会にでるための準備」「就労に向けた教育」「キャリア教育」などが実践されている。中央教育審議会（2011）の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」の中で、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャ

* い すじん 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

** はしもと そういち 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター

*** おだか くにお 順天堂大学

**** すぎおか ちひろ 福岡教育大学

***** ひろの まさと 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

***** くさか こたろう 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

キーワード：軽度知的障害／特別支援学校／自尊感情／教育支援

リア発達を促す教育」であると示され、加えて、キャリア発達について「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」としている。特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年公示）では、職業教科の指導計画の作成にあたり、生徒の望ましい勤労感や職業観を育むとともに、自己に対する理解を深め、自らの生き方を考えて進路を主体的に選択することができるように指導を行うことをあげている。そして自尊感情は「自分に対する肯定的感情」であり、「自分についてそれなりの能力と良い面をもった大切な存在とする感覚である」（園田，2007）。生徒の自分に対する肯定的感情は、進路選択と将来の生き方について考えるキャリア教育を実践する上で欠かせない。加えて、生徒らの支援ニーズの多様性と複雑さへの対応が難しいことから、様々なタイプを考えることが必要である。しかし、自尊感情のタイプについて生徒の障害を考慮した上でどのように指導・支援しているのかに関する研究は見当たらない。

自己概念は認知的、情動的、行動的側面を含む比較的包括的な構成概念（榎本，1998）であり、自尊感情は自分自身についての包括的、記述的概念の評価的側面かつ感情的側面を表しており、自己概念の一部と考えられる（園田，2007）。自尊感情と似ている概念の中に、自己肯定感がある。自尊感情には自分は価値のある人間であるという肯定的な見方をし、ありのままの自分を受け入れるという側面が含まれている一方で、自己肯定感は自尊感情という構成概念の中核を担っており自分の良い点、得意なところを認識しているか、気づいているかどうかが重要である（宇野，2013）。大谷・小川（1996）は知的障害のある児童生徒の精神年齢と自己概念との関連性について指摘しており、田中（2010）によると本来は精神年齢8、9歳程度になると自己を客観的に捉える能力があるにも関わらず過大な評価を行う傾向を紹介している。この場合に第三者として教員の役割は重要であり、知的障害者の自己を客観的に捉えるような教育実践が求められる。東京都教職員研修センター（2009）は自己評価を行うことが難しい特別な支援を必要とする児童生徒の自尊感情の傾向を把握するために教師による他者評価を作成することで児童生徒の自尊感情の傾向を把握し、学校の教

職員の共通理解の下に自尊感情を高めるための取り組みを推進した。さらに、軽度知的障害のある生徒らにとっての重要な他者として、担任を挙げた生徒が50%であったという報告もされている（李ら，2019）。生徒にとって重要な他者とされる教師の存在はとても大きく、重要な役割を果たすと考えられる。そこで本調査では、生徒の自尊感情と学習活動や行動における問題に着眼し教師の判断により実態を把握する。

また、海外ではその結果が一致していないものの、知的障害や学習能力の低い青年らにおける自尊感情の影響に関する様々な研究（Chiu, 1990; Lemétayer & Kraemer, 2005; Carroll, Friedrich, & Hund, 1984）が行われている。しかし、日本で知的障害児者を対象にした自尊感情に関する研究は見当たらない。

これまでの多くの研究は、知的障害児者の自尊感情について重要だ（小島，2010）と提唱し、その上で自己評価の低さに関する指摘（大谷・小川，1996）にとどまっている。しかし、自尊感情を含めたキャリア教育が盛んに提唱されて実践される特別支援学校における生徒の現況、アセスメントに向けた教師の捉え方・見立て、教育支援などの実際について詳しく示されていない。こうした学校フィールドの現況を明らかにすることは、今後のキャリア教育や自尊感情に関する支援を行う上で、生徒を包括的にアセスメントするために指標になりうる基礎的かつ有効な知見になると考えられる。そこで、まずは知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害のある生徒を担当する教師が、その生徒の自尊感情についてどのように捉えており、具体的な教育支援を行っているかについて明らかにすることにした。

2. 方法

2. 1 調査方法・対象者

対象者は、全国にある知的障害特別支援学校高等部714校に郵送にて質問紙を配布した。併置校を含めて送付し、依頼状において「知的障害特別支援学校高等部を担当する担任教諭1名」を宛てに回答するようお願いした。そのため、本調査では担任教諭に限らず高等部主事や進路指導主事も対象としている。本調査は軽度知的障害のある生徒の自尊感情に関する調査であ

知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の自尊感情を教師はどのように捉えて支援しているのか

る目的を明記した。

2. 2 調査内容

(1) 調査対象者のプロフィール

回答者の教員経験年数、担任または担当している学級の生徒数、その内の軽度知的障害のある生徒数について回答を求めた。

(2) 特定生徒1名に関するプロフィール

現在担当している軽度知的障害のある高等部生徒一人を抽出してもらい、その生徒に関する性別、障害種についての質問に選択式で回答を求めた。性別について「男」「女」「その他」、障害種について「自閉症」「ダウン症」「注意欠如多動症」「その他」の当てはまるものを選んでもらった。本調査でいう軽度知的障害とは、「概ねIQ50～70ほどで学習や適応行動の獲得に軽い遅れがみられる」と記した。ここで重症度のレベルとして示さず、IQ尺度として示した理由は、回答する教師にイメージしやすくするためである。

(3) 特定生徒1名の自尊感情の程度と学習活動や行動への影響

生徒の自尊感情について「高い」「中程度」「低い」の当てはまるものを選んでもらい、それぞれの自尊感情において「生徒の日頃の学習活動や行動への影響について教えてください」と自由記述で回答を求めた。また、「自尊感情」を「自分に対して肯定的な評価をする状態」と記した。また、その程度に関する評価は、「回答者が現在ならびにこれまで関わってきた特別支援学校の生徒らの中で、本調査の対象である生徒の自尊感情の程度について当てはまるもの（高い・中程度・低い）」を選んでもらった。

(4) 特定生徒1名の自尊感情への指導・支援の実施の有無と具体的指導・支援内容

自尊感情への指導・支援を「実施している」「実施していない」の当てはまるものを選んでもらい、実施していると答えた場合、具体的にどのような指導・支援を実践しているかについて自由記述で回答を求めた。

2. 3 分析方法

選択式質問項目の回答については、単純集計をし、割合を算出した。自由記述式質問項目の回答について

は、KJ法を用いてカテゴリー分けと統計ソフトRによるコレスポンデンス分析を行った。得られた回答を吟味し、著者6名の合議によってカテゴリー分けを行った。その際に、一人の回答者による複数の回答は複数のラベルに記入した。コレスポンデンス分析とは、クロス集計表を元に、質的データを視覚化して変数間の関連を把握するための手法である。加えて、障害種（知的発達障害のみ・自閉症の合併・ADHDの合併）における生徒の自尊感情を高中低で分類し、自尊感情の低い生徒への具体的指導・支援（自由記述）について比較した。質問紙では知的障害の用語に関し、DSM-5の知的発達障害（Intellectual Developmental Disorder）を用いた。

2. 4 倫理的配慮について

本研究への協力と発表において、調査の依頼文では得られた情報は研究の目的以外で使用しないこと、個人・学校が特定されないよう配慮することを明記した。調査用紙の回収を持って調査への同意が得られたものとした。個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。なお、東京学芸大学倫理委員会（申請番号248）において承認された上で実施した。

3. 結果

(1) 回収率

返送があった356校（回収率50%）の高等部の学級担任教諭356名であった。

(2) 調査対象者のプロフィール

回答者の平均教員経験年数は16.7年（SD＝9.4）であった。担任学級または担当しているグループの平均生徒数は、11.8名（SD＝18.2）であった。そのうち、軽度知的障害のある生徒数の平均は7.5名（SD＝10.4）であり、63.6%を占めていた。

(3) 抽出された特定生徒に関するプロフィール

生徒の性別は男子260名、女子95名（欠損値＝1）であった。生徒の障害種（欠損値＝2）については、自閉症を合併する者〔以下、＋ASD者〕76名（21.5%）、ADHDを合併する者〔以下、＋ADHD者〕63名（17.8%）、知的発達障害のみの者〔以下、IDD者〕146名（41.2%）、その他の者69名（19.5%）であった。

表1 自尊感情の程度(高・中・低)と学習活動や行動との関連

		高	中	低
行動・態度	積極的・意欲的な態度	14 (26.4%)	8 (16.0%)	
	消極的な態度・意欲の低下		8 (16.0%)	114 (47.5%)
	問題行動・発言			27 (11.3%)
	威圧的な態度	4 (7.5%)		
	注目行動			4 (1.7%)
	ルールを守れない			3 (1.3%)
	努力できる		6 (12.0%)	
対人場面	対人トラブル	7 (13.2%)		19 (7.9%)
	対人関係が良好	7 (13.2%)	10 (20.0%)	
	場の空気が読めない	2 (3.8%)		
	他者を強く意識する	2 (3.8%)		
	他者とのコミュニケーションがうまくできない			36 (15.0%)
	集団行動や参加ができない			24 (10.0%)
	周囲に影響されやすい			13 (5.4%)
	周囲に影響を及ぼす			9 (3.8%)
学習・指導・進路	指導・指摘受け入れられない	7 (13.2%)		
	実習や授業、学習への参加が困難			40 (16.7%)
	進路選択できない・将来に希望を持ってない			8 (3.3%)
	指示に素直に従う		5 (10.0%)	
情動	情緒的に安定している	5 (9.4%)		
	情緒不安定			22 (9.2%)
	ネガティブ思考			19 (7.9%)
その他	不登校			18 (7.5%)
	自己理解ができていない		6 (12.0%)	

(4) 自尊感情の程度と学習活動や行動への影響

抽出された軽度知的障害のある生徒の自尊感情について「高い」「中程度」「低い」と判断された(日頃より捉えられた)者は、それぞれ53名(15.0%)、50名(14.1%)、240名(68.0%)であった(その他=10, 欠損値=3)。学習活動や行動への影響に関する自由記述のうち、分析対象になった回答数は356件のうち、343件である。表1に示す割合は自尊感情の程度による学習活動や行動の影響に関する記述をカテゴリー分けした件数である。自尊感情が高い(N=53)と教師に判断された軽度知的障害のある生徒の日頃の学習活動や行動への影響は、「積極的・意欲的な態度」が14件(26.4%)、「対人トラブル」と「指導・指摘を受け入れられない」、「対人関係が良好」が7件(13.2%)であった(表1)。自尊感情が中程度(N=50)と判断された生徒の日頃の学習活動や行動への影響は、「対人関係が良好」が10件(20.0%)、「積極的・意欲的な態度」と「消極的な態度・意欲の低下」がそれぞれ8件(16.0%)、

「自己理解ができていない」と「努力できる」がそれぞれ6件(12.0%)であった。自尊感情が低い(N=240)と判断された生徒の日頃の学習活動や行動への影響は、「消極的な態度・意欲の低下」が114件(47.5%)、「実習や授業、学習への参加が困難」が40件(16.7%)、「他者とのコミュニケーションがうまくできない」が36件(15.0%)であった。

(5) 自尊感情への指導・支援の実施の有無と具体的指導・支援内容

自尊感情への指導・支援について実施していると答えた教員は319名(89.6%)、実施していないと答えた教員は27名(7.6%)、その他10名(2.8%)であった。自尊感情への具体的指導と支援内容に関する自由記述のうち、分析対象になった回答数は356件のうち、327件である。自尊感情への具体的指導・支援内容に関する主な記述内容について表2に示す。自尊感情が高いと判断された軽度知的障害のある生徒への指導・支援を実施していると答えた教員は40名、実施していない

知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の自尊感情を教師はどのように捉えて支援しているのか

表2 自尊感情への具体的指導・支援内容に関する主な記述内容

見出し	人数	割合	主な記述内容
個別指導	155	50.3	・個別に話をする ・個別にカウンセリングをした
褒める	128	41.6	褒めて自信をつけさせた
成功体験を積み重ねる	50	16.2	成功体験を増やした
SST (Social Skills Training)	13	4.2	・気になる行動について SST を実施 ・ SST を用い、行動場面を想定しシミュレーションした
興味関心について気づかせる	36	11.7	好きなことや得意なことについて言葉で整理した
主体的に考えさせる	24	7.8	「あなたはどうか考えるの」という質問をするなど自分の考えや意見を引き出した
役割を与える	20	6.5	当番やリーダーなど役割を与えて責任感を持たせた
前向きな言葉かけ	14	4.5	「大丈夫よできるよ」などの前向きな声かけをした
感情面のケア	21	6.8	・定期的に話を聞いたり、受け止めたりした ・気持ちを一緒に整理したり、代弁したりした
スモールステップ	22	7.1	できることから少しずつスモールステップで目標を達成できるようにした
振り返る	12	3.9	できたこと、できないことの振り返りをした
スクールカウンセラーとの連携	6	1.9	スクールカウンセラーによる相談支援
医療機関と連携	6	1.9	医療相談を受けた
失敗してもいいと伝える	3	1.0	失敗してもいいと伝え、一緒に学習活動に取り組んだ

表3 自尊感情の程度（高・中・低）への具体的指導・支援内容

	高	中	低
1. 個別指導	19 (47.5%)	14 (35.0%)	122 (53.5%)
2. 褒める	15 (37.5%)	17 (42.5%)	96 (42.1%)
3. 成功体験を積み重ねる	2 (5.0%)	1 (2.5%)	47 (20.6%)
4.好きなことを用いる	1 (2.5%)	5 (12.5%)	30 (13.2%)
5. スモールステップ	1 (2.5%)	3 (7.9%)	18 (7.9%)
6. 主体的に考えさせる。 自分の課題を決めさせる	3 (7.5%)	4 (10.0%)	17 (7.5%)
7. 前向きな言葉かけ	4 (10.0%)	3 (7.5%)	7 (3.1%)
8. 振り返る	3 (7.5%)	3 (7.5%)	6 (2.6%)
9. 役割を与える	3 (7.5%)	5 (12.5%)	12 (5.3%)
10. 感情面のケア	2 (5.0%)	5 (12.5%)	14 (6.1%)
11. SST (Social Skills Training)	2 (5.0%)		11 (4.8%)
12. 医療機関と連携			6 (2.6%)
13. スクールカウンセラーとの連携			6 (2.6%)
14. 失敗してもいいと伝える			3 (1.3%)

※表中の網掛けはコレスポネン分析結果による近い関係性を示した。

と答えた教員は10名であった。自尊感情が中程度であるとされた生徒への指導を実施していると答えた教員は40名、実施していないと答えた教員は9名であった。自尊感情が低いとされた生徒への指導を実施していると答えた教員は228名、実施していないと答えた教員は7名であった。自尊感情への指導・支援と程度

に関する質問の中で両方とも答えていない回答（N＝22）は除いた。表3に示す割合は自尊感情の程度による指導・支援の記述をカテゴリー分けした件数である。指導・支援についてKJ法でまとめた結果（表3）、自尊感情が高い生徒への指導・支援は、「個別指導」が19件（47.5%）、「褒める」が15件（37.5%）で多くみ

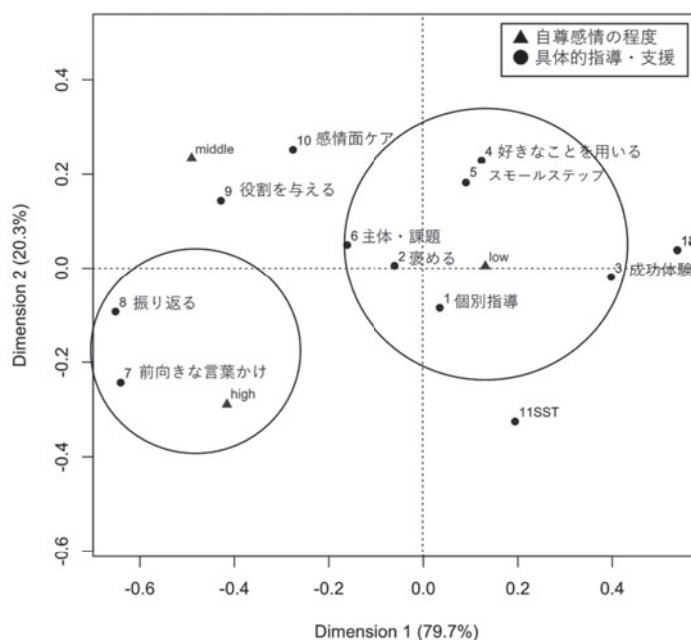


図1 自尊感情（高high・中middle・低low）と具体的指導・支援のcorespondens分析の結果

られ、低い生徒への指導・支援は、「個別指導」が122件（53.5%）、「褒める」が96件（42.1%）「成功体験を積み重ねる」が47件（20.6%）、「好きなことを用いる」が30件（13.2%）で多くみられた。自尊感情が中程度である生徒への指導・支援の場合、「褒める」が17件で（42.5%）、「個別指導」が14件（35.0%）で多くみられ、「役割を与える」「感情面のケア」「好きなことを用いる」がそれぞれ5件（12.5%）であった。

続けて、自尊感情（高・中・低）と指導・支援との関連について検討するために、corespondens分析を行った（図1）。その結果、自尊感情の高い生徒というカテゴリーと「前向きな言葉かけ」「振り返る」指導・支援、自尊感情の低い生徒というカテゴリーと「個別指導」「褒める」「成功体験を積み重ねる」「好きなことを用いる」「主体的に考えさせる」「スモールステップ」指導・支援がそれぞれ近い位置関係にあった。なお、2次元（Dimension1とDimension2）による説明率は、100%であった。表3にcorespondens分析結果に基づき作られたグループを網掛けで示した。

(6) 障害種における自尊感情の程度

軽度知的障害のある生徒の自尊感情の程度（高・中・低）を、障害種（+ ASD 者、+ ADHD 者、IDD 者）ごとに、教師によって判断された自尊感情の高中

低で分類した（表4）。表4に示す割合は障害種における具体的指導・支援の回答件数である。この時、障害が合併している場合（N = 90）は外れ値として扱った。 χ^2 検定を行った結果、障害種と自尊感情には関連性がみられ（ $\chi^2(4) = 10.677, p < .05$ ）、生徒の障害種と自尊感情の程度には偏りがあることが明らかになった。 χ^2 の残差分析の結果、自尊感情が低く、+ ASDである生徒は有意に少ない（調整済み残差 -2.2）ことが認められた。自尊感情が低くIDDである生徒の場合は有意に多く（調整済み残差 3）、自尊感情が高くIDDである生徒は有意に少ない（調整済み残差 -2.7）ことが認められた。

障害種（+ ASD 者、+ ADHD 者、IDD 者）における自尊感情が低いとされた生徒への具体的指導・支援についてKJ法（表5）によって分類したところ、+ ASD 者の生徒の場合、個別指導（26件、60.5%）、褒める（15件、34.9%）、成功体験を積み重ねる（10件、23.3%）の順に多かった。+ ADHD 者の生徒への具体的な指導・支援については、個別指導（18件、46.2%）、褒める（14件、35.9%）、成功体験を積み重ねる（7件、17.9%）好きなことを用いる（5件、12.8%）、感情面のケア（5件、12.8%）の順に多かった。IDD 者の生徒への具体的な指導・支援については、褒める（44

件、43.1%）、個別指導（43件、42.2%）、成功体験を積み重ねる（20件、19.6%）、好きなことを用いる（13件、12.7%）の順に多かった。

続けて、障害種別と指導・支援との関連について検討するために、コレスポネン分析を行った（図2）。その結果、IDD者というカテゴリと「個別指導」「褒める」「成功体験を積み重ねる」「好きなことを用いる」「スモールステップ」「振り返る」指導・支援、+ASD者というカテゴリと「SST」「主体的に考えさせる」「役割を与える」指導・支援がそれぞれ近い位置関係にあった。なお、2次元（Dimension1とDimension2）による説明率は、100%であった。表5にコレスポネン分析の結果に基づき作られたグループを、網掛けで示した。

4. 考察

本調査は、全国の知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害のある生徒の自尊感情とその支援について、教師の捉え方と判断について調査した。その結果、全国の知的障害特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害のある生徒の実態や支援の現況が担任教諭の判断により明らかになった。

自尊感情が高いとされた生徒の場合、積極的で意欲的な態度が一番多かった反面、対人トラブルや指導・指摘を受け入れられない面もあった。自尊感情が低いとされる軽度知的障害のある生徒に関して教師は学習場面や現場実習にとどまらず、対人関係など学校生活のあらゆる場面のつまづきをあげて、その影響を憂慮していた。

また、自尊感情の程度と関係なく、ほとんどの教師が軽度知的障害のある生徒の自尊感情への指導・支援を実施していると答えた。自尊感情への指導・支援の具体的内容としては、支援や指導（個別指導や褒め）には共通性が見られた。自尊感情が高いとされた生徒には前向きな言葉かけがよりなされていた。門田・森（2015）は担任教員がキャリア教育の視点を取り入れた肯定的な評価を行うことにより、児童の自尊感情の高まりと学習意欲の向上に効果がみられたことを報告している。一方で、低いとされた生徒には様々な指導・支援がなされていた。本調査の結果では、自尊感情の

程度における指導の共通性から自尊感情が低い軽度知的障害のある生徒において、有効な実践については支援ニーズの違いからタイプや個人差を考慮したさらなる検討が必要である。

軽度知的障害のある生徒の自尊感情の程度と障害種別には偏りがあることが明らかになった。西田（2012）によれば、小学生の自尊感情を育む学級経営を行うためには、チェックリストのような評価基準から学級を定期的に評価し、客観的な指標と比較検討し、学級経営の課題を見出していく必要があると指摘している。軽度知的障害のある生徒において、自尊感情の高低や個人差、加えて、その影響について教師は明確に意識や留意している中で、自尊感情の程度を測るチェックリストなどを用いて適切に評価をしながら生徒の障害種と自尊感情の程度に合わせた指導・支援が必要ではないかと考えられる。

障害種別にみた軽度知的障害のある生徒（自閉症が合併する者・ADHDが合併する者・知的発達障害のみの者）の中で、自尊感情が教師から低いと判断された生徒への具体的指導・支援の特徴として、自閉症がある軽度知的障害の生徒には、他の障害がある生徒より、SSTが多く実践されていることがわかった。SST（Social Skills Training）は専門的スキルを要するため、多くの教員は実践できないものの自閉症がある生徒に効果的であり、自閉症がある軽度知的障害の生徒にも実践されていたと考えられる。知的発達障害のみの生徒への指導・支援については、他障害の生徒と比べ、様々な試みがなされていたことが明らかとなった。

本研究の課題として、特別支援学校高等部の教師に対する質問紙であるため、軽度知的障害のある生徒の現況について、回答者である教師の判断や推測によるところが中心であったことが挙げられる。特に、軽度知的障害のある生徒の自尊感情を測定する難しさがある中で、教師の実績や過去の経験から得られた知見に基づく判断や見立てである可能性が考えられる。本来は、知的障害児者本人による自尊感情に関する言及に基づく知見や直接的な質問が適切であろうが、知的障害に起因する表現性の困難さや調査研究の限界がある。また、今回のデータはあくまでも関連があることについて示されており、自尊感情の程度と学習への影響に

表4 障害種別にみた教師の判断による生徒の自尊感情の程度

		障害種			計
		+ASD 者	+ADHD 者	IDD 者	
自尊感情	高	16 (21.9%)	14 (22.6%)	13 (9.9%) **	43
	中	14 (19.2%)	9 (14.5%)	16 (12.2%)	39
	低	43 (58.9%) *	39 (62.9%)	102 (77.9%) ***	184
	計	73	62	131	266

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.005$

表5 障害種別にみた自尊感情が低いと判断された生徒への具体的指導・支援

具体的指導・支援	障害種		
	+ ASD 者	+ ADHD 者	IDD 者
1. 個別指導	26 (60.5%)	18 (46.2%)	43 (42.2%)
2. 褒める	15 (34.9%)	14 (35.9%)	44 (43.1%)
3. 成功体験を積み重ねる	10 (23.3%)	7 (17.9%)	20 (19.6%)
4. 好きなことを用いる	5 (11.6%)	5 (12.8%)	13 (12.7%)
5. スモールステップ	1 (2.3%)	2 (5.1%)	8 (7.8%)
6. 振り返る	1 (2.3%)	1 (2.6%)	4 (3.9%)
7. SST (Social Skills Training)	5 (11.6%)	1 (2.6%)	3 (2.9%)
8. 主体的に考えさせる 自分の課題を決めさせる	4 (9.3%)	3 (7.7%)	3 (2.9%)
9. 役割を与える	4 (9.3%)	2 (5.1%)	4 (3.9%)
10. 感情面のケア	3 (7.0%)	5 (12.8%)	1 (1.0%)
11. 前向きな言葉かけ	4 (9.3%)		2 (2.0%)
12. スクールカウンセラーとの連携	1 (2.3%)		3 (2.9%)
13. 医療機関と連携	1 (2.3%)		1 (1.0%)
14. 失敗してもいいと伝える			2 (2.0%)

※表中の網掛けはコレスポネンス分析結果による近い関係性を示した。

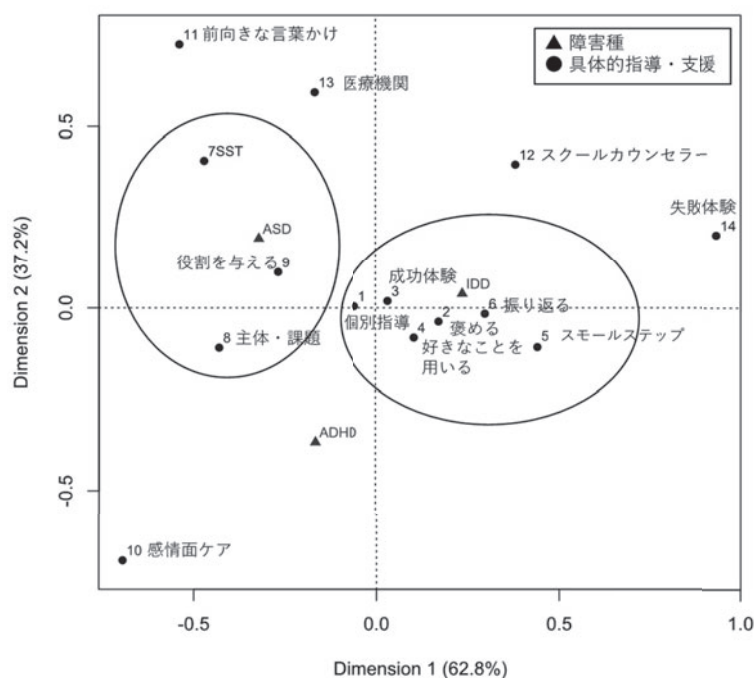


図2 障害種別にみた自尊感情が低いと判断された生徒への具体的指導・支援

因果関係があるとはいえない。加えて、知的障害児者の自尊感情に関する研究や調査は極めて少なく、スクリーニングテストのように判別・査定やカットオフ値が存在しないため、あくまで対象が所属している集団の中で、ある個人の主観からみた推測による部分が大きいと考えられる。しかし、一方で、先に論じた通り学校教育ではキャリア教育と自尊感情を高める教育実践が大きく期待されている。そうした学校フィールドで、平均16.7年の教員経験をもつ中堅教師らの回答は、現在の学校で担任・指導する軽度知的障害のある生徒の自尊感情をどのように判断し、支援を展開しているかという実際などについて率直に注視していくべきであろうと考える。そして、今後の知的障害のある生徒の自尊感情の理解・把握や教育支援の方法の検討・開発において自尊感情や障害種といった個人差を考慮した指導の必要性が示された点から有益な知見が得られたと言える。その一方で、自尊感情における支援や指導の実際の効果については明らかにできていない。今後は、自尊感情や障害種といった個人差にに応じて、実践事例などを通して検討する必要があるだろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (APA) (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (5th ed.). Washington D.C. 高橋三郎・大野裕 訳 (2014) *DSM-5 精神疾患の診断統計マニュアル*. 医学書院.
- Carroll, J. L., Friedrich, D., & Hund, J. (1984). Academic self-concept and teachers' perceptions of normal, mentally retarded, and learning disabled elementary students. *Psychology in the Schools*, 21, 343-348.
- Chiu, L. H. (1990). Self-esteem of gifted, normal, and mild mentally handicapped children. *Psychology in the Schools*, 27, 263-268.
- 中央教育審議会 (2011). 中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について. 東京, 株式会社ぎょうせい.
- 榎本博明 (1998). “自己”の心理学—自分探しへの誘い—サイエンス社
- 門田なぎさ・森和也 (2015). キャリア教育の充実に向けた教育課程や指導方法の工夫改善について: 担任以外の教員が行うキャリア教育の視点を取り入れた肯定的な評価による児童の自尊感情と学習意欲の育成. 高知県教育センター研究紀要, 74-85.
- 小島道生 (2010). 第1章 知的障害児の自己の発達と教育・支援. 発達障害のある子どもの自己を育てる内面世界の成長を支える教育・支援. (編) 田中道治・都筑学・別府哲・小島道生, ナカニシヤ出版, 22-25.
- Lemétayer, F., & Kraemer, D. (2005). Contexte scolaire et estime de soi à l'adolescence: étude comparative entre adolescents non déficients et adolescents présentant une déficience intellectuelle légère [School context and self-esteem in adolescence: a comparative study of typically developing adolescents and adolescents with a mild level of intellectual disability]. *Revue de psychoéducation*, 34, 57-70.
- 文部科学省 (2019). 特別支援教育資料 (平成30年度). 令和元年1月, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456_00001.htm (2020年5月18日取得)
- 文部科学省 (2019). 特別支援学校高等部学習指導要領 (平成29年4月公示・平成31年2月公示). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1386427.htm (2019年6月10日取得)
- 内閣府 (2004). 「第7回世界青年意識調査報告書」<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/pdf/top.html> (2019年6月10日取得)
- 西田依子 (2012). 小学生の自尊感情を育む学級経営のあり方: 自尊感情が低下する中学年を中心に. 教師教育研究, 8, 163-172.
- 大谷博俊・小川巖 (1996). 精神遅滞児の自己概念に関する研究: 自己能力評価・社会的受容感と生活年齢・精神年齢との関連性の検討. 特殊教育学研究, 34, 11-19.
- 李受眞・橋本創一・尾高邦生・林安紀子・小林正幸・柊千晶・杉岡千宏・山口遼・熊谷亮 (2019). 特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒の自尊感情と他者意識・他者との関係性に関する実態調査. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 第70集, 143-147.
- 園田雅代 (2007). 今の子どもたちは自分に誇りをもって

いるかー国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情ー. 児童心理, 862, 874-883.

田中真理 (2010). 第4章ADHD児の自己の発達と教育・支援. 発達障害のある子どもの自己を育てる内面世界の成長を支える教育・支援. (編) 田中道治・都筑学・別府哲・小島道生, ナカニシヤ出版, 22-25.
東京都教職員研修センター (2009). 自尊感情や自己肯定感に関する研究ー幼児・児童・生徒の自尊感情や自

己肯定感を高める指導の在り方ー. 東京都教職研修センター紀要, 8, 3-26.

宇野宏幸 (2013). 自尊感情, 自己肯定感, 自己効力感を高める指導・授業づくりを考える: 発達障害のある子どもがいるクラスを中心に (特集 障害のある児童生徒・青年へのキャリア発達支援 (1) キャリア発達支援における主要な課題とその解決に向けた具体的方策). 発達障害研究, 35, 287-295.